



スワジランド王国から来たネルソンさん。
詳しくは2面研修員eyeで。

世界のこと、もっと知りたい!

もしり

Moshiri



2015年
60 春号

2015年 4月1日(水)発行

HOKKAIDO
INTERNATIONAL
CENTER(OBIHIRO)

JICA北海道(帯広)ニュース

「もしり」とは、アイヌ語で大地の意味。
北の大地から、国際協力の「今」を伝えます。

<http://www.jica.go.jp>

「高校生国際協力セミナー」

どうしたらお腹いっぱい食べられるの?

～毎日「いただきます」が言える幸せ～

平成26年度の高校生国際協力セミナーが1月11、12日JICA北海道(帯広)にて開催され、参加校は鹿追、釧路、芽室、帯広より5校、計17名の生徒が参加しました。今年は「食」がテーマで、1泊2日かけ多方面から学びました。ここで講師を務めるのは、帯広畜産大学国際協力ユニットのメンバーです。後期の授業で考えたプログラムに沿って進めていきました。初対面の緊張を解くべくアイスブレイキングでグループづくりを行い、食に関する基礎情報はクイズを交えながらわかりやすく説明し、その後「お弁当屋さんゲーム」を行いました。国内農家や食料輸入業者、お弁当屋さんになりきって参加した生徒たちは、ゲームが進むにつれて世界の食料事情を疑似体験することになります。そこで、日本の食べ残しが多い

事や、食料の買いすぎなどが身近な問題であることに改めて気づくのです。また、違う学校の生徒とグループになり、相談しながら問題を共に考え共に乗り越えることでお互いを知ることができ、視野が広がり相手を受け入れられるようになりました。その背景には「なんでも相談できる優しいお兄さん、お姉さん」と頼りにしていた大学生の大きな存在がありました。セミナーの最後は、身近なもの(こと)をより具体的に、そして自分ができそうなことは何かを考え、家や学校にもちかえり自分たちが発信者となることを約束しました。最後にみんなで集合写真を撮りましたが、卒業式の後のようにいつまでも名残惜しくおしゃべりをしたり、アドレスの交換などを行っていました。

アイスブレイキング



齊藤 沙耶さん 長谷川 類さん

齊藤さん 何かを0から始めることの難しさと、やり遂げた時の達成感を味わえました!自分も楽しめてよかった~!!

長谷川さん みんなの緊張をほぐすアイスブレイキング!私が緊張した!畠山さんのお話で海外にもっと興味がわきました!

ワークショップ1



牧野 哲也さん 山本 香織さん 高野 潤さん

牧野さん セミナーは、人にわかりやすく・"楽しく"伝える方法を考える良い機会になった。ワークショップ1でその難しさを痛感!

山本さん 私は主に飢餓の原因について紹介しました。高校生や私達にもできることを見つけてことが大切なのだと思います。

高野さん 途上国の人々の食生活や課題について紹介しました。「伝える」ことの難しさ・やりがいを感じました。

ワークショップ2



尾関 佑樹さん 佐々木 晴充さん 石川 寛子さん

尾関さん 何回も、何回も試行錯誤して作り上げたゲームで、不安だったけど高校生の笑顔が見られてやってよかった!

佐々木さん ゲームを通じて、分かり易く日本と開発途上国との繋がりを高校生に伝えられて良かったです。

石川さん 一からゲームを創ることがどんなに大変でやりがいがあることなのかわかりました!

ワークショップ3



牛腸 健司さん 岸本 明莉さん

牛腸さん イベントをイチから作り込んでいく準備期間は、長くて大変でしたが、皆のチームワークもあり最高の日々でした!

岸本さん 高校生と勉強できた2日間はわたしの宝物になりました。

グループワーク



若井 楓さん 五十嵐 萌子さん

若井さん 私たちもフレッシュな高校生達から学ぶことがたくさんありました!見知らぬ高校生同士がだんだんと打ち解けていく様子がとても嬉しかったです^^

五十嵐さん グループ作業でお互いの意見を受け入れながら、協力して一つのものを作り上げていくひたむきな姿に感動しました!

食事班



吉松 美穂さん 細矢 千佳さん 脇本 花奈子さん

吉松さん 高校生だけでなく参加していたみんなが楽しそうでも嬉しかったです。美味しいご飯が最高でした!

細矢さん 準備段階からワクワクドキドキでした!当日は参加した方から楽しかったと言ってもらえて良かったです。

脇本さん 当日は参加者が積極的に交流していたし、この企画運営を通して自分の成長も感じることができました。

世界から日本へ 研修員 eye アイ

JICA北海道(帯広)には、研修員受入事業として開発途上国で必要とされている知識や技術を学ぶために各国から研修員たちが来日しています。彼らは帰国後、自国の発展のために指導的な役割を果たすことが期待されています。

スワジランドからの研修員にJICA北海道(帯広)での過ごし方を聞きました。

スワジランドからやって来たネルソンさん

(スワジランド王国)



農民主導による普及手法(B)コース

■名前:ネルソンさん

■出身:スワジランド王国



Sawubona (サウボナ)
(スワジ語で“こんにちは”)

Q1 スワジランドってどんな国?

アフリカ南部の内陸に位置する小さな国で、サトウキビや綿花の生産、牧畜が盛んな国です。日本に来るにはビザの取得を含めると丸6日もかかってしまいます。

Q2 母国と日本との農業の違いは?

とりわけ北海道の農業は、規模も大きく、生産から流通に至るまで携っています。日本で学んだ農業ビジネスを母国で伝え、国の農業者の所得を向上させたいです。

Q3 日本の印象はいかがですか?

日本は伝統をととても大切にしている印象を持ちます。食の分野では古くからの和食文化が守られ、なおかつ異国の食も多彩に取り入れていますね。

Q4 日本での滞在で驚いたことは?

マイナス20度にも冷え込む冬の北海道にびっくり。来る前はとても耐えられないと思ったけどかえって良い経験になりました。



~JICA研修を支えてくださっている方をご紹介します~

課題別研修
「農民主導による普及手法(A)(B)」コース
■コースリーダー 帯広畜産大学
教授 門平睦代さん



終了式後の懇親会にて

Q1 国際協力(JICA研修事業)に携わるようになったきっかけを教えてください。

子供のころからアフリカに興味を持っていて、一度は行ってみたいと思っていました。国際協力というより、アフリカを知りたいという目的で青年海外協力隊員(獣医師)として1981年4月にザンビアへ派遣されたのが国際協力にかかわるようになったきっかけです。北米での大学院進学を経て、その後も獣医学の専門家として、国連(FAO)やJICA(ザンビア大学獣医教育プロジェクト)専門家としてアフリカを中心に国際協力の仕事をしてきました。

Q2 JICA研修に対してどのような想いでご協力いただいていますか?

私個人で開発途上国の人々に貢献できることは限られています。研修員のほとんどが政府の職員であり、農民と直接、関わる人々です。彼らの意識を変革させ、農民がかかえている問題に気づき、ひとりであっても手助けできることがあるという意識を持っていただくことが重要だと思いました。そこで、研修事業をとおして、研修員の方々の個人の努力を褒め称え、励ましていくことで、自国の貧困緩和に積極的に貢献していただけるのではないかと考えています。

Q3 思い出に残っている研修員がいましたら国やエピソードを教えてください。

ある年の研修グループは全員が自国のおみやげを持参していました。その中でも、とくに記憶に残っているのは、タンザニアのザンジバルから来た方です。へちま(スポンジ)として入浴や食器洗いに使う)、くつ用マット、かごや布など、どうやって持ってきたのか不思議に思うほどの大量さ。でも、今回はだれひとり、おみやげを持参していませんでした。研修員はランダムに選ばれて派遣されているはずですが、どうして年によりこのような差がでるのが不思議です。



市役所表敬訪問

ボランティアの現場から

青年海外協力隊

渡邊 美希さん



派遣国:ザンビア
出身:小樽市
職種:津別町立津別中学校
職種:青少年活動
派遣期間:2014年7月~2016年3月



Grade5集まれ〜!!

Zambianっ子!

Zambianっ子は一言で言うと「タフ」です。授業をしていると「疲れたー!」「おなかすいたー!」「帰ってシマ食べたー!」と、日本の生徒と変わらない反応をしますが、サッカーをする、鬼ごっこをすることになると靴をほっぽりなげで裸足で走る走る走る!!家計の助けに、登校前でも街まで売りに30kgは超えるカゴを持ち、片道2時間の道のりを歩く歩く歩く!!50kgの炭をひょいっと肩ののっけて運ぶ運ぶ運ぶ!!と、日本では考えられないぐらいの距離を日々歩き、走りまわっているZambianっ子たちは、体力的にも精神的にもタフだなーと日々実感します。そして、すぐ家族思いです。家に帰ると妹や弟をおぶりながら遊んだり、宿題をしたり、働く親の代わりにご飯を作ったり、おつかいをしたり。「大変でしょ?」と聞いても「ふつうだよ。」とさらっと答えが返ってきます。それからZambianっ子は「感情表現が豊か」です。気持ちをとても素直に表に出します。男女関係なく、腹が立ったら怒る。泣く、叩く、飛び蹴りだしてちゃいます(笑)。嬉しかったら踊ったり歌ったりして全身で気持ちを表現します。きっと、携帯電話やインターネットが子ども達に普及していない分、「直接感情のやりとりをする」ことに真っ直ぐなZambianっ子なのかもしれません。



気合いを入れる時は裸足がイチバン!!



50kgの炭をひょいっつ!!